

## 「仏道原点の参究」

山口県 かいちょうじ 海潮寺住職 きむらえんしゅう 木村延崇

先日、気象庁ではことしから「生物季節観測」9割を廃止する、というニュースが流れました。57種類もの動植物を対象として、動物や昆虫がその年はじめて観測された日、花の開花日など、季節の移ろいをとらえてきました。

ウグイスの初鳴き、シオカラトンボの初見、リンゴの開花、などが廃止される一方、さくらや梅の開花など、一部の植物だけは継続して観測されるそうです。環境の変化や都市化によって生態系が変わり、観測が難しくなってきたことが理由にあげられましたが、動植物の観測データは世界的にも例がなく、大変珍しいとのことでした。

悠久の昔、先人たちは、変化する四季に対する知識と経験を積み重ね、効率的な農耕方法や素朴な宗教儀礼を編み出してきました。さらに太陽や月など、天体の動きまでも視野に入れた暦も開発し、大自然・宇宙全体と人間生活が調和する、繊細で独特な感性が培われてきました。気象庁によるユニークな生物観測もその一端を表しているといえるでしょう。

周期的な環境変化をあらかじめ把握しておくことは、計画的な人生設計にもつながり、将来に対する安心感を得ることにも、十分な効果を発揮してきました。

ところが、いつ起こるか全く想定できないものがあります。それが、他ならぬ自身の老い、病、そして死です。これらは都合よく先延ばしにしたり、いつまでも棚上げにしておくわけにはいかない人生の一大事です。最近では、老後を見据えた「終活」や「墓じまい」などが注目されていますが、これらはいわば対症療法です。

もう一段深い見識、すなわち老病死を含めた自らの人生にきっちりけじめをつけて動じないことが仏道の原点であり、どのような時代にあっても歴代の祖師方は、この一点を命がけで参究なされました。

昨今の感染症危機は避けられない現実ではありますが、心までも支配されぬよう、常に仏道の原点をゆるがせにせず、研鑽を積んで参りたいものです。